

55 豊後杵築の医学史・補遺

佐藤 裕

北九州市立若松病院外科

麻田剛立（一七三四～一七九九・天文暦学、解剖学）
杵築藩の儒家綾部安正の四男。一七五七年十二月十五日杵築で初めて月食を観測。後大阪に出て先事館にて天文学・暦学を教えた。剛立の解剖学上の事績は、中井履軒の越俎弄筆や三浦梅園宛の書簡によって窺い知ることができる。

工藤謙同（一八〇六～一八六一・久留米藩蘭方医学の祖）

文政年間に長崎においてシーボルトのもとで西洋医学を学んだ謙同は、再度の長崎での医学修業からの帰途、一八三二年に請われて久留米藩において医業を開いた。そして、幕末期に尊王倒幕運動を主導した真木和泉守と親交を結ぶようになった。この和泉守の献策により藩における医育と医制の刷新が推進され、文久

三年には久留米藩に医学館が設立された。西洋医学を実践した謙同は地元の漢方医界からは敬遠されたが、和泉守の後援を受けて西洋医学を推進し、久留米における西洋医学の鼻祖と讃えられるようになった。最大の後援者であった真木和泉守を祀っている水天宮の境内に、久留米に西洋医学を根付かせた謙同の顕彰碑がある。

小田魯庵（一八〇九～一八七一・華岡流外科医）

帆足万里門下の小田魯庵は万里の紹介を受けて、紀州の華岡青洲の家塾春林軒に学ぶこと五年にして帰郷し、杵築藩内の八坂中平村に開業した。万里先生文集のなかに、小田魯庵が帆足万里の妻の「乳瘍（癌ではなく、膿瘍か）」を切開手術によって治癒せしめたことが知れる一文が、以下のように掲載されており、華岡流外科医としての一面を垣間見ることができる。

「山妻患ニ乳房一爾以ニ鉤吻貢霜一治レ之 已瘥又
発 小田生為割レ之賦謝

病毒多年著ニ乳房一 快刀割下似レ剥レ腸

論レ方怪 巧過レ我 唯用一杯麻沸湯」

一八四八年には参勤交代をひかえた日出藩十四代藩主木下俊方公の痔疾を手術により完治させている。これを契機に日出藩に召し抱えられ、一八五八年に日出藩の中士に列した。一八七一年に六三歳で没した魯庵は、木下家の菩提寺である松屋寺墓地に葬られている。

石川清忠(一八五四―日本医科大学の創設者)

杵築藩の家老職の中根家から石川家(養父は中根家の出で、清忠の叔父にあたる)の養子となった清忠は、明治七年に中津の医師藤野玄洋に学んだ後上京し、桐原真節についてさらにドイツ語を学んだ。その後、済生学舎で医学を修了し、明治十三年からは出身校済生学舎で教鞭を執った(済生学舎の廃止後、明治三十八年東京医学校を創設。さらに明治四十二年には日本医学校と合併し、これがのちに日本医科大学となった)。

小川含章(一八一二―一八九四・帆足万里門下、儒家)

小川鼎三先生の養父となった小川含章(家系図上、含章は鼎三先生の大叔父にあたる)は、日出藩士小川玄龜の子として一八一二年に生まれ、幼い頃より帆足

万里の門に学んだ学者である。嘉永六年に江戸において杵築藩に召し抱えられ、帰郷後に藩校学習館の儒道教授となった。含章自身は医家ではないが、但馬の国生野銀山の学問所の塾主を勤めていた弘化年間に、今日の珪肺にあたる公害病を「抗山病」として詳しく記載している(日本初の鉅害報告書とされる)。

小川鼎三(一九〇一―一九八四・日本医史学会理事長)

鼎三先生は小川含章の弟で医家の井坂玄琳の孫として、一九〇一年杵築に生まれた。杵築の郷土史に詳しい久米忠臣氏によれば、鼎三先生は日本医科大学創立七十周年にあたる昭和四十八年に日本医科大学において特別講演をされたとのことであるが、鼎三先生の実家井坂家と石川清忠の生家中根家は、南台の坂をはさんで玄関同士が相對峙していたということである。

昭和五十九年(一九八四年)に亡くなられた鼎三先生の墓は、日出藩主木下家の菩提寺である松屋寺にある。